訂正
増補 古今雑歌集 全

大熊淺次郎編纂

補增正訂

古今雜歌集

版權所有

嘉落堂發兌

訂正增補古今雜歌集緒言

漁人は漁歌を作りける農家の田歌を作りける山樵は樵歌を作りける舟人は船歌を作りける軍人乃軍歌を作りける小學は唱歌を作りける之を歌ひ之を唱ふなど其体如の音調能く優美なる詩歌作り感動興奮力ありて志氣を鼓舞し風俗を淳化し忠孝を奬勵し国家を涵養する効用頗る偉大なるは昔賢相八之故以て邦家政教乃要務となせしなれあり此の歌集生涯音楽の癖頗る国歌ほれは音楽は友をもとめ音楽乃書を讀み種々の歌を筆記し一之を蒐録し毎日諷誦して以て忠義を志ひ

以て己れ[illegible]樂の一科となせり[illegible]ち出雲
[illegible]義豊[illegible]人余の[illegible]を請ひ澤保吉
氏の事を及ぶ[illegible]人[illegible]ひよ思ひ[illegible]
數篇の歌集を繙きて曰く世の幼[illegible]
をして之を[illegible]せしめなば庶幾けくは世を人
心を洗滌することも[illegible]少なからせんへしとを
携へ帰り真[illegible]之を梓ぶとなせると乃ち此編の
抑〻本編の載する所[illegible]氏名家の作歌は係
り既に人口に膾炙せるもの多く今殊に
と人[illegible]ものを[illegible]園
とよく象と偕にするを以て乎とする[illegible]出
でたるもの[illegible]

明治廿九年　月

編者識

訂正
増補古今雜歌集

目次

○石堂丸　一丁目
○赤垣源藏　今村外園作　七丁目
○竹林只七　〃　八丁目
○阿波鳴門　十丁目
○曽我夜討　今村外園作　十三丁目
○月照入水を悼　十四丁目
○大石内藏之助　今村外園作　十五丁目
○中村勘介　〃　十六丁目
○伊藤小左衛門　江島茂逸作　十八丁目
○豊太閤　二十丁目
○木村長門守　今村外園作　廿二丁目
○玉政復古　廿四丁目
○楠公櫻井驛遺訓　廿五丁目

○七卿長州下向　廿五丁目
○西郷隆盛追慕　廿六丁目
○直實曉ふ敦盛を追ふ　今村外園作　廿七丁目
○米一丸　廿八丁目
○谷村計助　仝　三十丁目
○日本地理數へ歌　大熊淺次郎作　卅一丁目
○那須與市　今村外園作　卅三丁目
○元寇の歌　卅五丁目
○元寇筑紫の神風　仝　卅六丁目
○宗像お政の歌　藏六居士作　卅七丁目
○小三金五郎の歌　仝　卅九丁目
○勤王詩集　四十三種　四十二丁目
○書生ぶし　三種　四十八丁目

目次終

訂正
增補

古今雜歌集

石堂丸　大熊淺次郎編輯

月ふ義雲花ふ風
繞梁餘音犯漢紀承
探頭守護を固る
婆婆の子は太感ずく
諸國御りと出ふ
十月余りの宮を拾ふ
王のやうかる子を持ち
憐ふる其父親を
ゐね強へ忍れされハ
父ハ高野ふ出ハ
母上樣と諸ともに

撒りて墓ふき世の習ハ
大隅薩摩七六ヶ國
加藤左エ門重氏ち
故郷ふ妻子を殘し
御堂手里の脇門ふ
捉ふく安達泰盛
石堂丸と名付しが
十三年のその間
石堂十四の春の二月
風の便りに聞しかば
押取捕縛もいとふ

紀州をさして出よけり
せいかも忘れ石堂と
高野の麓のかむろ庵
石堂丸しゝ母君や
いかゝ石堂少殿へ
父上様ゝ逢ハ度と
宿の亭主ハ少よりも
申上ます孫の客
弘法大師のいはしゐゝ
ゆゑ母君おとろきつ
なゝ情ゝや石堂丸
汝郎山ゝのほられよ
父ハ人よりせい高く
最早日暮の旅の空
潮く二人ハ紀の國の
茶屋の主ゝ宿をとり
永の旅労の物かたり
翌日御山へ登りゝバ
何心なく嬉しけり
かゝる一間ゝ立ちすそ
ゝの御山の定めゝハ
婦人御山ゝ登られず
我子の袖ゝ取すがり
母ハ御山ゝ登られず
父の人柵をゝへんと
左の眉に黒ゝあり

疵前ゝまゝの人在ハ
級ハ逢ゝもあれども
母ゝ安心させたまへ
いそれて石堂悪ゝつ
杖を伏りの高野山
善悪二の道けゝ柳
悪魔の怨ゝ不動坂
目も入柵のその滝ハ
うがハゝ水で身を清め
志ちせのゝゝ口打唱し
南無大師の不動尊
我が是まで来りハ
七月半ゝ捨られし
是を伝拠ゝ忘ぬべし
一度ハ此ゝ帰りきて
二十依三日の暇ごひ
涙ゝがらゝ立登る
鳥もかよハぬ屏風岩
三枯の松ゝ五枯の杉
通道れハ峯ゝ糸滝
滝の不動ゝ立すゝ
金のくゝりを手はゝ
水晶の珠ゝ手を合
並ゝ御山の御開山
十三年の先の事
わか父上の此山ゝ

おもするはをぞ乱
何卒逢せて給へれと
其後は御堂ふ打伏ぬ
枕の枕ふ立屏風
五更の空も明け渡り
東雲雲と諸共ふ
又も御山ふ登りぬ
峯こ谷こ此度彼処
父の在家を尋ぬれと
小さき草ふ結け登り
あれか樵のかむろ扁
一度八樵に降らず八
八斗付りに成き流み
遥こ分ねて来りしふ
いくも殊勝ふ伏し拝み
憐ふる哉石堂は
三更四更の夜も更て
早や寺この明の渡
夫より御堂を出れて
九百九拾の寺こや
佛菩薩を伏拝み
是ぞと思ふ人もかし
遥か谷間ふ立つ烟り
二夜三日の日も過きて
母様安ーと云そんと
ふも涙を搬ー止め

無明の闇ふ惑かり
苔莚迷心童氏八
尤ふ光輝右ふ珠数
御山を降り玉ふ時
互に親とも我子も
見上げ見下る顔と顔
苔莚僧の御衣
親子の因縁是非も迷
衣の袖ふ取りすがり
此の御山ふて我が父の
ゆ存あらハ御情けふ
云れて苔莚因よりも
腰ふ指ー大る小袖さし

遥か向こふ見渡せハ
其日八大海の花の汲
光明真言唱へつ
石堂九八上り渡
ねど側八立寄りて
石堂九の振袖と
袖と袖とかもれあふ
其時石堂苔莚の
申上様御僧さ海
今迄心ふかられと
何卒教へて給ハれと
見れハ幼き壱人旅
さやハ要色けーなき

使ハせめつきの金ふき
下絃ハ黒の一ツうち
某加義を名のる時
ハ不思義と思ハ共
心の内を取り直し
如何ふ年若かりとも
此御山の定めふハ
昨日そうたも今遠忍
四方の出口に札をそ
左すれハ名ねる其人ふ
若しも逢れた其時ハ
遠ふ見るあの森ハ
乳子も名ねる人あらハ

国黄ハ孔雀の一ツ羽ね
中ハふにかハふねども
打頼ふせ一小紙さし
頼らひ我名ふ記りと
石堂丸に折渡ハ
そうの扇の名ねハ
五年そうたも今遠忍
夫でハ事のおゝと
国と家の名を記し
逢ハ事のありや共
其札取りて捨て玉へ
あれか野山の札ふ場
夫を記拠に逢ふと

関て石堂涙だぐみ
御書き状成て落れと
今も途中の事ハ
我が住所ふ来りかハ
聞て石堂嘉びつ
頼へハ苅萱講みて
草の庵ふ連れ来り
硯ふ向て一筆を形り
問れて石堂涙ぐみ
探題守護を司る
忘れ形ふの石堂と
持ちたる筆を書居し
志ぼし涙よくれけれハ

情れ山ふ悪に其札を
頼むをふて苅萱ハ
矢ふも持す筆も迄
其札書きて進んと
御恵状成て降れと
石堂丸の手をかりつ
鞍をぬかせ上ようのげ
国ハ何ふ名ハ何んを
ふハ筑紫松浦の
加義虎王門重氏の
名れハ苅萱ふ聞きて
思ハずわつと声を上げ
石堂夫れと見るより

歎せ玉ふハ不思議也
父上ふれハ片時も
云れて荊堂思ふよハ
扨よ我子か悶絶やと
郎山の式破られば
我ハ父よハあらねども
我兄弟の如くして
去年の秋の末の頃
空くなりし不便さよ
尋ねまゐし甲斐もなく
空けバ石堂聲きて
粥く涙をしぼりて
墓ふくなりし憐れさよ

是れ郎君様何なる
早く郎名のり下されと
早れ早恋かきるかれ
云んとせしがまて志
せきくる涙をし止め
其荊堂と申せハ
見よ爺と睦みしに
墓ふき病よかりつ
海山戦えて遥〳〵と
其故涙をこぼせしと
わつと計りふ泣き沈み
此が誠か郎君様
定めて墓所ハ有あん

憐れ郎君恋よ其墓を
猶へハ荊堂空よりも
其頃五ちし新しき
是れハ其方の父上の
きていなく恋しきの
中より五出に麻衣
逢ふこと有ら進よと
石堂尋ね来かよと
どつと打伏し泣き沈む
始終の様子を空よも
思ハ涙ハつと声を上げ
野山を越て尋ね来て
名残をしき金襴の

教へふされて下されと
涙ながらも五ち上り
石碑の前ふ連れ行て
墓ふくなりし事を空
皆ふせをいり間ふ爺の
父上様ふ 婦君が
持て来りし甲斐もなく
たつた一言空かせて
後ふ五ちし一荊堂ハ
こゝろ乱し胸のため涙
如何よ石堂尼しやり
空くなりし事を空き
とハ云ひながら空悲安

涙ハ佛の為かゝ
母上様ゑ此てけを
此れハ御山の御供物
去れて石堂脇さゑ
荷蓋傳ゑ前向ひ
推し戴て下りける
石堂帰りのおそき故
石堂夫れとハ探さゞ
鞋をときて足そゝぎ
屏風を開き手をつゝ
只今帰りきまし[illegible]と
是は不思議と云ふて
總身苦ゑ冷へ渡り

一度禁ゑ降られて
新しく面向を洗ひ玉へ
母上様の土産かり
涙かゝらも立ち上り
永の御礼申されて
懐れかる哉母上ハ
宣しくかゝり懐さよ
玉屋が茶屋ゑ帰り来て
奥の一間ゑ走り行き
母上きまよ石堂が
云へ共帰へ共答かし
様子を見れハこハ何な
石堂見るより驚きて

思ハゞ驚かず赤を吞
助け玉へよ観世音
所辺の送を整へて
涙かからも拾ひ上げ
父上様ゑハ生分れ
心細くも只ひとり
早く帰りて此よーを
思ひ帰れバ姉君ハ
法事のかゝ湯ゑ立ち
一度からで二度かゞ
死ゑ分れとハいかばかり
かる浮間ゑ逢ひ玉ふ
如何ゑ我子を殺人を

前后も知らぬ泣き流む
涙く涙をゝしとゞめ
形ゑ送る白骨を
天ゑも地ゑも後かき
母上様ゑハ死ゑ分れ
便りゑかるハ姉君と
姉君様ゑ法ちんと
其日が週度四十九日
懐かる哉石堂や
三度迄の姉君ゑ
婆婆の習ひと云かゝ
最早帰ぬる人ハ法
天ゑハ作ぎ地ゑハ伏し

頼む心の懈れさよ
高野ふ登りし其時ふ
尋ね行くよう外ハなし
救ひ玉ふと思ふあり
心の中ぞ哀ふる
栄の庵ふ尋ねゆき
助け下されぬ御得極
終ふ御弟子遠玉ふ
紀州を始め國々を
此ふ住所を定められ
命の終る其時ハ
かる遺言のある通り
子も亦た地蔵の化身と

石堂丸の思ひふハ
哀み玉ふ御得をバ
是を尋ねて参り赤ハ
又も高野ふ登ねゆく
漸く茲ふ苅草の
何卒御弟子遠玉へ
云れて苅草ふ流も迄
夫より高野を出なて
備ふ素波て信濃迄
師匠と弟子よと巻るの
親子地蔵を作り重き
親ふも地蔵の化身ふ
今日ハ昔の恩酬り

信濃で名高き善光寺
御本尊ふて陸ふき
南無や大悲の地蔵尊

赤垣源蔵

黄昏告るかねの音も
つれて降り来る白雪の
軌ふハ今雪ふの刺と
人目欺むく泥辞の
阿新陀かづきの破笠ふ
王を包みー袴なも
ぞ別離苦をぞハ飲の
栄田が宅の門手ごち
いかぞ暮させなまくん

御門ふて石堂寺
親子地蔵と申ス也

今村外園作

凍りがちふる寒風ふ
積るうらみの君の化
暗ふこてろの赤垣が
威儀乱したる千百里
赤き金羽をまとハ
これや一世の別れぞと
辞ふかしてとぼくと
今日の寒さを見上ハ
取決せよと命ずれバ

許多の奴婢ハ顔を合せ
まもをひそめて鼻ふ袖
御内室ハ御病氣と
最とも案ぜらるゝおもひが
勇さへ来ぬる位利酒
半そ〻して起上り
或る大名ふ抱えられ
思へハ長き月と日の
労をり給ひ〻四高恩
朝霜暮雪の折ふれば
御夫婦ともに百年の
具さふ申〻上てよと
玉蹄の命の果敢かきを
何もかがらの敬所ふ
立人ハ御殿へ出給へ
れかき言葉ふ重賢ハ
絵かき事とあきらめつ
涙と共ふ鎖ふがら
我ハ今回西國の
形納ハまだきふ立て出
浪くこの身を種くふ
死でも忘却仕まつらじ
必らずいとも世絵ふ様
御寿命祈り奉る旨
残す言葉の末よく
さとすふ似たる後の音ハ

諸行無常とひゞくめり
外ふ立出て一と重下
道ハ迷ハぬ忠臣義志
雪を蹴立てひと駆ふ
ひき昭が父や月雪の
天よ川よと押寄せて
内ふ隠れ〻吉良殿を
四十七士が尖刀を
花咲く春のこゝろして
安かあらぬか今の世ふ
鎧としもハ作がる〻
栄へ功こそあハれなれ

竹林只七

平やふ夜道と赤垣が
ほろりとこぼす王鋒の
宗徒の武士ふ後れじと
岩をも徹す桑の弓
中ふ命の捨どころ
こゝろも黒き炭俵の
深雪の中ふ引すえて
朱ふ染たる韓紅ね
天地ふひゞく凱歌の
治りたへて武士の
人ハ朽ても消へぬ名の
栄へ功こそ捨がたしけれ

今村外園作

君ふたの方を捧ぐれバ
孝ふこころを委ぬれバ
忠孝全たからざるを
世の大方のかこつふハ
節またもーき竹林
赤穂の城主内匠頭
頂ハえ録十四の春
吉良義英が亡骸を
徳川幕府の殿げみて
世ふもたけき落文ふて
屠腹の命をそ正ける
長矩厳を禄より
至懲断腸の思ひふて

親ふ不孝の憾あり
君ふ不忠の悲あり
いふ〳〵よりの通患と
川ふ換たる呉竹の
只七隆重と呼れしハ
浅野長矩の臣下かり
主君内匠頭殿ハ
憤りたる短慮より
一刀斫つけ給ひしが
儀の沙汰ハ無残ふも
只七の母ハ乳母まて
育て申せし事ふれバ
老の袂の涙志げく

志ぼりもあへぬ幕を
孝心厚き遠慮より
病ふかり給へ如か
朝の嵐の出さふも
こころ急つ今日と云ふ
五月の空の月かゞ
憂ひの雲の後ろより
只七ひそかふ表こびつ
独むおもひふ沼春の
鳥の声ふ覚されつ
枕の下の韓紅ね
這ハ何故の即自害ぞ
さーも丈夫のこころふも

鎧さめ暮し只七が
若や此程母人の
心や狂ひ給ふらんと
夕の風の入さふも
胸と騒ぎ折ふしふ
最と珍しき笑顔さへ
拝まるふしのありれバ
形てハ心安ーとて
爰バかりふる短夜を
母の枕元ふ伺かへバ
只七重と伏まろび
面母上と抱起ー
一斯の不覚ならくと

蹴す洞の玉櫛笥　ふた声三声叫べども
争で答へのあるべきだ　六魂去て空怪の
もぬけの殻の側に　今宵なごりの命を
涙ふ深し香のあと　母ハ未来の厭極ふ
死出や三途のお供せん　水望達し給ハぬしゝて
究天松地の恨を　呑て遥去り給いたる
即心ぜを察しあバ　お覚悟こゝありたけれと
我才を捨て其子あバ　勵まされたる健氣さに
只七才も母もあらバこそ　痛歎恐憤を方寸の
うちふ湛えて睡る間ふ　五臓をしぼる血の涙
我が君のみか親をさへ　双の睛とふしつるよ
おもへバ惜き義英と　純忠至孝の誅ふハ
鬼神も為ふ泣ぬらん　至誠の眼は義英を

闇の底より見出て　四十七士のゝの中ふ
高名過一と惜はれし　忠孝全たき梅さこそ
花ハ散りても尽ぬ香の　世ふ匂ふこゝ愛たけれ

阿波鳴門

南無や大悲の観世音　年はも行ぬ順礼を
導き玉ふぞ有難き　こゝふ憐れを止めしハ
阿波の鳴門の物語り　哀ふつけても憐れ也
お語と云へる幼子が　二人の親ふ生別れ
暫く祖母の養ひで　年ハ九ツ母けの春
面も東も知ねども　二人の親ふ逢んとそ
顔をも見知ぬ幼子が　順礼姿と身をやつし
背ふおいずりすげの笠　一人大悲の影頼む
あれ古里こちに出て　知らぬ旅路ふ赴けり

戀ひ方の一念ぞ
尋ねて行くが津の國の
若し此辺ふ二親が
のきばくふ立寄りて
問ふる夢の嬉さふ
どれく報謝を進せんと
見れば幼き二人たび
阿波と書きなる君つゆや
宮めて連れ八親子たち
推量て見をぬき
我身の上を泣き玉へ
德島城下で御座候
私が三ツの其年ふ
親世菩薩ふ捧ぜて
流連の御ふ留りけり
居することも在んかと
思へも 惜まぬ想ひて
お弓八夫れと泣くよりも
盆ふ白米の志ぞ
笠の文字を涙もれば
今行二人と祀せ八
國八何處と尋れば
是れ申し阿方様
我れ八四國の阿波國
如何かるとか名ね共
二人の親ふ生別れ

其親様ふ逢ひたさふ
僅か此世ふ生れ来て
顔をも知らぬ此世ぞ
何卒親ふ逢んため
順礼するのも御座候
家の軒場ふ寢る夜八
野宿ふ寢て八欲もすぐ
吹く其時の恐ろしさ
豊ふ眠る事八ふし
二人が中ふいねて
思へば胸のやるせなく
私も二人の親あれば
愛因つゝひ自興しやと
順礼するのも一人也
大恩受け八父母の
無間地獄の責とふり
親世大恩ふ取りすぐり
夜八野ふ臥し山ふ臥し
犬ふ吠られ追出され
獅子や狼の喜ぶを
永の旅路ふ一夜でも
何つか二人ふ興り合ひ
父よ母よと云ひたさよ
よそのふ供を見る事
こゝろ共に辛抱も有まは
涙ぞも語りけり

笈て古弓ハ胸の中
親傳の名をバ名ぬれバ
其名も高き十郎兵衛
若しも御存知なかりバ
笈て古弓ハ涙ぐみ
涸ふ殘せし跡かと
遥く我等を尋ねつ
見れバ姥しき憐さよ
先つ駈る者ハ涙かり
目頭の罪ふ落るより
夫より奥の一間よ
少しふれ共心さし
渡せバ古弓ハ氣て

若しや我子よ生んかと
父ハ名もある武士の
母ハ弦弓と申しまし
何卒敵をて玉ハれと
能く見れバ我子かり
遠き旅路も厭ずふ
是迄廻り来かよと
夢かうつかふ知ねと
早や名らんと思へ共
國ふ停すふ外ハふし
包みし金を取出し
是を報謝ふ進上と
永ふくは存ずれと

金ハ沢山あり外と
是れ幼き頃礼乗
金が扶しも親子共
辞退せば共取てた
序るを待ちて屋り天ハ
星雨もかくとあり涙の
喝ふる夜のつきふハ
序ら老やんすか頃礼乗
必らべけがをせぬ様ふ
別れ涙の玉ま箱
あとでお弓ハ羽抜る
女の口ふハひとり言
子細のありて出ぞや

もどせバ古弓ハくと説
永の旅路をする時ハ
ふるハ浮世の変ひふ
國ふ序りて二親の
心張ふも指し戻に
果れる夜を徒ぬ
重ねて邸貝ふ名
どうでも必ハ兵を改故
早く故郷ふ帰られよ
南無大慈観世音
思はぬ涙で泣き出に
我等二人の身上ハ
能くくる祈て来のと

どもて名家を堕れやう
狂きの如く出て行し
吾家ハ飢る迄すがち
一人源の順れハ
金をたんとするをそて
扨も順れその金を
言バ順れ繋るいて
幼ハ心の一條ハ
取んとせしハ稀男きう
母れをそ高し何ぞ
声雅し止めて手を強
瞞れかる哉色かわり
南無大悲の観世音

親の心ハやるせなく
程や知ねバす郎兵衛
見るハ嬉れやうすの
教ゑの恩報謝なりて
無理ハ引人ハ連れ帰り
吾ハ流して泣れよと
いへく金でハあ申せん
思ひ出ハ無ハ手を撫て
二ハいてやと袂を上げ
ハ手をあく稍し暫し
間もなき内ハいきたへて
絶ハ安しく泣ハけり

曽我硯付

建久四年の夏もや
黒白もとかぬうバ玉の
待場ハ覗ひ寄たるハ
消し河津がかた牙ハり
俱不戴天の親の讐
討て親孝ゑる孝の
思ひ起せしこと勇の
国指す陣所を何れぞと
手柏掲げて立出し
志のひ入たる国のうち
死生の際ハありしも
如何ハる空やたどるらん

今村外国作

半道ぬる五月雨空
間を縫ひつ富士が根
花沢山の夕暮時と
十郎五郎おとゝしが
左衛門尉祐経を
亡執張させまつらん
道ハ素より遠ハ程と
尋ねつゝたる折ハし
虎が赤さけの忘るべハて
無常迅速一呼吸
志らぬ熟睡の夢ハそも
伯仲ハ顔を合して

名ぶりかけつ袴結
歟も名ふ奥ふ男柴ゑ
枕刀ふかける手の
ひらめき淡る稲妻の
たちまち閃く優曇花や
恨ハまれて世の中ふ
祖父か歌の右桑下
五郎朱れと袴成が
素より血氣の時柴が
當るを幸ハ新排ふ
新田四郎忠経が
呼ハる声ふ借も榜げ
風ふも堪えぬ一佳人

枕を丁と蹶飛せバ
岸彼と起るや左手なる
此の時遅く頭上ふ
光とるもふ血けふりの
蒸ふ十八年末の
望ふき茅の草さらバ
討て寝上の友ふせん
勇みふ勇む郷子春苗進
しかでたなふ事やある
時しも眄をつらぬくハ
十郎の首取なと
力も落て秋竹の
彼岡ぶかふ側らを

忍び行よと不るちふ
物々しやと時致が
殘矣とふめバ梁板も
見ふ伴ふ死出三途
出きて汝ら数年月も
作けバ高き富士よも
裾野の秋の秋の夢のみか
土のべハ袖ふ露そちる

月照入水を悼

花の都も秋ハ猶
名ハ流れたる清水や
秋の栗毛の深むこふ
乱れ行く世の浪花江や

むづと組付く五郎丸
抓みふがらふ力足
武蔵遅もこてふ摔かれて
川の流れの夫ふそ
悠と妻ふ七百年
土るきハ暮がたふけり
偲べハ袖ふ露そちる

夕べ淋しき風情也
落ち来る滝の音羽山
散るや紅葉の散くと
蘆のさハりハ敏ふくとも

尚ほ世の為めに身を捨て
波の音の絶えぬ岸の波からぬ
色も変らぬ青柳の
多く羅の袴を打波り
万代経けて君が代の
神ふあもみを第一の
業の主を善く問へば
御手をハ降し給ませ
たゞみ重ねて白波の
恨み浦てのもうたすき
濡れ衣塚の濡れきぬも
風かて博多の備後ひ
又た行く方ハ薩摩浮
やきむ迎も紫浮
揉いつも深みどり
秋隠城て番推浮
千代の松系千代八千代
千本の松ふよそへつ
社ふ掛け四の文字
延喜の帝かまくも
此処も昔ハ石畳み
ふせ一ためしを忘れじと
掛けてちぎりも憐かり
我身ふ着たる心せん
此処も波風強く
沖の小島ふあらね共

心ほそさをみやこふて
たよるハ心つくし人
結ぶう人も波路へて
せき止められて又舟ふ
波ふ当られて行先ハ
頓て鹿児島雑の名
又ふかぶふ揺るきて
回ハ神会月望の夜
照う輝きて軍り家き
此処ふ一人の薩摩人
乗りも深き舟の沖
乗合人も舟人も
去りとハ知らず白波の
流れか憐れと思ふん
ひとりの外ふ打ぬけて
野宿の関所の関守ふ
宗れとも夫れとよる方も
黒の瀬戸てふ名もうしや
業編めて潜みしが
回向を指して舟出せし
かたぶく月と法とも
身は大君の為ふとて
如何ふ成る為は先の世
底のもくづと成ぬるを
かいの志つくの三途程も
立ちさわけ共甲斐ぞ

狂東西の唄鳥

大石内蔵之助

秋の夕ふ風冴えて
冬の朝ふ雪ふりて
家貧ふして孝子出で
忠と人ふ作がる
天柱にてふ折けるも
小勅搖うたぬ大石が
強るおもひを忍びつ
人の眠を欺むかん
ふきつ通ふ祇園まち
外面ふかざる極楽ハ
酒の機嫌で森るまと
唱ふ外ハふかりけり

今村外園作

抽の節の教母しく
杠の揉ぞ顯ハまし
時世乱れて忠臣の
誉も高き山科や
地軸ハこてふ崩るも
衛士の林ぐ犬の大分也
身まつれ隠密と
為とばかりふ心ふは
色と酒とふ雑されつ
何國のほと、思ひしに
丹波嶋がこの墓を
誰か身ふ引く後慕志
南兎ひらへたひふし
夫とまて臨ひんで
桐ふ遊ハん大名の
事でうがひ知らるべき
果ハ倒れて雪祇の
浮世の風ハ我れらず
三陸の奥ハ兎ふ角ふ
加茂の川瀬の秋の月
金鱗うかぶ涼しきも
東の空の混世界
積るうらみの君の袋云
四十七士が一時ふ
遊びれしてこ正体も
血氣をなのむ逸り男ハ
罵詈雑言を加ふれと
こころの底を無雅の
良旌ハ坐臥の間も忘ぼら
音ふも絶たる大軒
嵐の山の春景しき
見西る混りの元あれ
玉兎沸ふたバーりて
猶てハ飽て色がふく
降しく雪ふ夜ハ更く
うちも揉ひ一義義重
唄と揚たる凱歌の

こゝも墨田の郭なる
恥ある世そと思ふ者を
心のもとも今はれて
節も亜ある竹芝の
首を手向て焼香の
むかし恋しき松の風
幾代経ぬとも君か名の
不断の香や常盤の
秋の夕ふ風さえて
緑弥まさる松の梢

中村勘介

身ふ漆して乞食と
做ふとも人ふけれども
いさこと問ん武士の
朱ふ染ふす東天紅
鮮かふ冴る朝日影
泉か岳の菩提所ふ
けふりと共ふ消果し

今村蓬雄作

ふり捨て縁を捨てふ
同し忠義の心より

身を窶したる青菜妻
こゝも淋しく解けりくハ
世ふも知られし塩蔵きの
むかしの姿ひきかへつ
みるも哀れふ短福ふ
吉良ふ義英か動静を
中村勘介ふらべやと
怪しみつも見かへれバ
妻の冬子か密父ふる
萩師左内と云ふ人あり
言葉の裡ふ表げくと
永き月日の浪くふ
寔ハまた強い容かたち

冬菜の活了ハ宜しと
赤穂の義士の一人と
中村勘介正辰ふり
嘗俺臥彩ふ面痩て
青菜荷ふて君の供
窺がひあるく夕きれ
思ひもかけぬ呼ハ達そ
故郷の空ふ残したる
播州三百月の淡中ふて
一別以来と寒暄の
左内ハ聟を打まもり
苦労ハ嘸とおもひしが
我ハ今度結婚ふて

江戸法作せられがば
家族を挙て来りしが
絶え果たるを哭みち
親子三人が明暮ふ
今日までこそ安せーぞ
青菜売とハ何ぞ
和君ふ與へおくほどふ
富かふ彷彿来よ由と
ふかき心のありぞとも
約てこそハ帰りけれ
あり事ども言ひきけ
青菜撥ぎ晴昔ふハ
羽織袴大小も
弁を幸ひふ妻娘
旅ハ和君の喜住の
東ふ着てその日より
和君の所在探りつ
如何ふ落られたれどと
使ひのこせーこの金子
些さか仲裁拵らへて
八重の潮路の底ひを
志らぬ荒浮ハ再会を
然れバ左内ハ妻娘も
今日や明日やと待程ま
打て変たる侍の
さすが威あり猛かひ

昔ふかへる勘介が
左内夫婦の喜びふ
父の号ふひきかへて
互ふ無事を祝つ
語りつ閉つする時も
今回人の撥捏ふて
抱えられたる才の蛮
おん供致す若ふれば
冬子を誘ひてよ
落ふく所為申さと
金を包みし小扱紙を
涙をかくす今老空離
世ふ今宵ハ消て行く
彷徨来るぞ不法ある
一とはまさる妻冬子
むかしかからの密かなち
別れほど経し妹と春駒子
正辰除ら堅を正し
西国方の大名へ
加て主君の御改ふ
再び返り来ん日まで
委細ハ明晩系上して
今宵の遠去ふ若干の
妻ふ托して永別の
をりもふれる白雪と
我とも志らぬ時の変

まつらん人の悶惱と
ゆ着の緒ふ後ろ髪
こぼす瞼の一雨下
落れバ忘恩谷川の
佛も果敢ふきもの哉と
吐息と共ふつき出す
はや黄昏かゝる空模様
たらバふこめて出てゆく

紀の淡海 伊後ふ在歌
紀の長歌

袖の淡ふ縁ある
花の盛を尋ぬれバ
伊後を京の氏として
大海孫乱の性を稟け
鉄石心の正辰も
吾と引き心地して
涙よ雨よとかハれども
水のわ来と人の才ハ
思ひぶかゝふ屈詘の
種ハ是常の音ふ浮て
一斯の別れを一言の
心のうちぞ健気ふる

江嶋義遠作

多ふつかゝき後波の
二百余年の其むかし
小左来門てふ其人ハ
彼のコロンブス范蠡を
思ひ合する計りふり
日本計の商業を
國の大林ふ顧みゝ
八幡の旗を押たて
亞媽港ふる淡ふも
貿易ふして店はりて
積り帰り我國の
仰ぎハたかーぼ笑ふ
然ハ言とも此事の
才ふ戒のつたかつら
婦夫貌子の外ふまた
衆多の人の命まで
其時哀れをゝーきハ
其ふすゆざの概畧ハ
事狭しとや思ひけん
潮の八百條の八潮路ふ
支那朝鮮の外ふ亦
日本町の名をとほせ
幾千年づの残窟を
窩を助けし其功績
探れバ深し玄界海
世ふ顯れて未練ふ
動ると知らん痛ハや
手代番頭下女下男
皆牲犠とふりふけり
捲魂ふとき小左来

四寸ふ余るとしをせを
笑て登りし法隆ふ
見し人数を揚しとそ
是ぞ寛文七年の
今其墓をたづねよ
をぐらく茂る荒藪ふ
吊ふ人もふく行り
此たび日清貿易の
此大都世の春とかり
猛き心の荒尾氏が
事業盛ふ興さんと
國の光をまいらをが
奬励を駐て日本の
嫉妬したる利心ハ
婚ーと云ふも海りあり
今勃然運の回るを
彼ふき人ふ実せふバ
第一業の蔭の魂も
奈ふ嬉び慰さまん
いそく進め壮夫よ
後を拝ひてたまくげ

一朝と成て十字架よ
見し人数を揚しとそ
忘れつき二十九日ふる
在嫌山の妙樂寺
義と萬ふまとはれて
さハ去り先ら所らけき

再び日本町と云ふ
神の溪をきづくべし
市街設けて溪ハふ
そでの溪を築くべし

豐太閤

生れし國ハ山名の
古今ふ例し中村の
紙面彌助の二子まで
喝べし頃の世の中ハ
諸侯ふ割據の英雄も
義吉情ら思ふ様
室しく過ぐ時ふらず
我才を寄せて功名の
偶ふ招下ふ平治の
我ハ思くの伸びざるを
尾張の國の愛知郡
鄙ふ育ちし幼子ハ
其名を木下義吉と
麻の乱るゝ中ふ
興廃盛衰定めなく
此乱世ふ生れ来て
世ふ横しき英雄ふ
端数けなき人と思ふが
僕ふ成りて仕へしも
業ちて更ふ行長ふ

仕へ〻後ハ一心ふ
君義一途ふ才を固め
兵の怨引圖ふ蒐り
祖を屠りて剱ぬきし
後ふハ羽柴秀吉と
天正年間信長は
次ふ光利を攻むる時
打ち任せつゝ親からハ
本意を遂し心地まて
光秀不意ふ驚ハ来て
此報一回秀吉の
逆賊義道の光秀ハ
打ちて捨ずふ戻ぎと

誠心推して余念なく
運籌帷幄奇付より
攻めて八歌の城をとり
光りと共ふ榮昇りて
名象りし義双の勇士
猛き勝れ亡ぼして
此事を任を秀吉ふ
西の都の本能寺
安意居て有けるが
無情や信長戦ぬる
許ふ至るや引返し
君の怨ぬ為り國の賊
心ハ矣竹山崎や

八幡の山や洞が嶽
陣ふ池入り義三義三
瞬間中ふ攻め殺し
或ハ降し又殺し
其績の高けれハ
性豊臣を賜りて
兵馬の權ハ一握り
北條氏政攻め降し
爭ふものハ絶へて
勇気脆りて弱り
勢ひ外ふ溢れ来て
文禄元年大軍を
向ふ所ふ敵もなく
彼より容る〻其和睦

要所ふ待ちて先秀の
非横蓋を切まくり
我ふ双向ふ奴ふは
身ハ関白の職ふつき
命ふ服せぬ我久や
六十余州を治へて
織田氏ふ代り覇を唱
之ふ従ふつはもの〻
事朝鮮ふ及ばんと
託して進む金山海
朝鮮ハ遂蹂躙し
心地よ〻と凱旋を

為せしも来たるは思の
再び慶長元年ふ
撃て撥きて日の本の
支度半はふ秀吉ハ
黄泉の客となつれど
名ハ幾千代の後迄も

木村長門守

第一節

木村長門守重成ハ
幸ふ稱ハれし傑士なり
勅命ありて関東と
今日も使ひハれ来の
血客見奪けの涙として

当籠の安禅を耐へ難く
兵を起して故国を
威名を彼ふ知らせを
空しく消ゆる水の泡
異域ふ残る老屋の
稱て偲へて尽さん

今村外園作

大阪城の柏石と
慶長甲寅の冬
和睦の約の懲ひつ
茶臼山の本陣へ
向ふ事と分れりけり

開も重成ハ右大臣
同じ乳房ふすがりたる
年もひとしく二十二の
智勇兼備の心とて
その時軍師幸村を
我ハ今日敵陣ふて
閉ておどろく幸村の
其の状云ハん受給へ
一時の和睦ハ成しかど
争でこの侮辱すべき
埋るをまちて又文ふ
幾ふかけて見られを
然ハさりふがら今ほて

秀頼公と八右尼
乳兄弟の間ふて
未だ去れふ寄ふ
人も得去らぬ涙あり
密かふ招きて云ふ様
一命捨ん覚悟ふ
顔を凝視て居もあた
今度京都の勅裁は
智謀ふ長ける家康が
大阪城の外壕の
攻来らんハ疑かじめ
軍師も疾ふ到給ハん
和睦を拒み奉りふハ

遠勅の罪を知ぬ人ぞ
事成ちぐ不仕たれば
去りつゝ外遠理めんハ
斬るかも〳〵ふ之成ハ
傍若無人ふ振舞つ
血気ふはやる住井中田
かからぬ我を殺すべし
和睦の使者を殺なる
名臣しらして事煩がふ
再び兵を交へつゝ
三年が間この城を
天下ハ我ふ返るべし
みだれくし世の義中
己むなく蜂起なりと
彼が非心を顕らかふ
世ふも思かの至り矣り
茶臼山の敵陣ふて
能まく奇神働らかバ
酒井を始め自侍の者
されバ右大将秀頼の
遠勅の罪ハ無ふあり
是を云葉の備として
軍師が聖と名神祭も
衛り給ゞ自づから
をハ云へ麻の引ハへて
秀頼公の御先途も

見届けずして死せんを
心を察し給へよと
こぼす涙の玉くしげ
理せめてあハれふれ

第二節

人の命を刺みつゝ
勢く宗馬の響の音
知らせふ長門い幸樹
今日を限りの四名殺
永の別れを惜まんを
涙かくして除くを
因業きこ侍者の怒
盃取て湯はりぬ
かへすがへすも口をしき
事もかすみとはろくゝ
ふた度逢ひめ見ぬを
奥ふ空ゆる漏刻や
はや御立と武士の
用意しつゝ堂を起て
秀頼卿ふ御暇乞
素袍の袖ふ万斛の
御前ふ伺候迫はれ
餞せんと御手自から
水村八やぢら遠みつ

廿餘年の春秋を
世の推移のそれもかく
もれぬ教こそ悟られ
思へば驚ふかりかる
濁るこいとてあれかる
卒とばかりふ秀れの
行列長々しく敬陣の
素より公禮働らきつ
既ふ弱しかる事あれ
玄関にまで進みき
甘ろげかから授刀
夫とみるより勵声喉
お使者刀ハ遠慮あれ
守衛も去らぬ仕へしも
今者ハ常嘉の程ふ
今を一船の決別と
心の底ふこそ悟られ
長門ハ心はげまし
部前を離しと太平ふ
茶白山へ行せける
此處ふ一金拔けんと
時す孤城籠るの作
奥へ通るも鋭ロを
安藤成家の輩ハ
大部殿様の内室の為
公禮であらうと制するを

長門ハ確と面眼まへつ
汝達ここを忘れもあれ
其大部殿のお言を
望みふ望みー敬味方
和議意ふふ似たれ共
尚ほ且つ敬の陣所ふり
使する事候らハぐ
刀ハ寸時も放されを
命を納ふ放つ沁矢
敬むきかねて神文よ
家ふ重成の熟かり
水のあハれやむ事なき
若江堤の夕ぐ波と
大部殿様よ内府よと
斯くこそふ木村重成ハ
昨日まで八得まほーと
今や系統の勅裁よて
御血書の泡まで八
汝達この沃後敬陣ふ
この戸成を○本と
言語ふ絶え傲慢も
家康ふも忘かずかよ
真血をそぎ給ハーハ
かくまで心を世ーも
再び消る重鎖の音
消しあとこそ涙ふれ

王政復古

王政復古の為時を
三年の冬の十二月
都の空ゆ立昇る
世はかりなもと乱れつ
鞍馬ゆ郷巻く闘の交
里の伝も三台の
暁晴き雲の羽伏見
錦の御旗靡く
勇気やまひますら男
東き渡る浮雲の道
血汐ゆ深る紅葉の
倒れ重る屍は
思へバ遥き慶応の
九日の日を初めて
春の光もこれ丹けの
あやめも分ぬ雲深の
濃の神ゆ輝くや
新落れ巻くしぐれの
大内山の山風ゆ
大将軍のいでまして
雄たけひの音雷と
斬りつ斬れつ剛武叫喚
丹き心をとりぐゆ
歌か身方か彼へ倒れ樹

踏乱しつく戦場の
かざし剣の柄の巻も
遥のはてこそ憐れ乱
臨逆巻く淀の川
煙のすゑのかけろふも
長閑き春ゆ打霞ひ
結りつ殉む盃ゆ
夫の宴ゆそ楽しかりけれ

楠公櫻井駅送別

建武の昔しの正成ハ
是は一とせ都せめ
下し給ひ倫なかり
われ兄ゆ南ゆ帰るかハ
知ひ常ゆき義の身と
君を忘れぬ武士の
天地も動く君動ゆ
覆るそこの忽ゆ
消て活る君が代の
昔語りと過ぎし世を
老いたる我もかつ聞る
肌の守を取出し
ありし其時帝の
之を汝ゆ與ふべし
世ハ尊氏の世となりて

叡慮を悩し奉らんハ
さは去りとかから正行よ
忠義の道ハ重て知る
家名を汚すこと勿れ
あはれみ扶助し給へ
月の桂はさて浪や
旗を再び翻へ
叡慮を安んじ奉れ

七卿長州下向

世に苅菰と枕れて
塚の小川ふ霧立て
うら傷ましや玉きる
安房国佐野郷

赤根さす日もいとくらく
隅のすみと寂りふけり
内裏ふ彩暮とのゐ世
壬生澤四條東久世

其外神ふ路どの
旅ふしあれハ約さ奉
降しく雨の絶間なく
是より海山渡茅原
浪花の浦ふたく接の
行んとすれば東山
彩ふ々ふ空ふ乱
ふべて今者ハ哀れ者
払ひそしても數の

今うきこゝの定めなき
進み進てそ動へう
涙ふ袖はぬれはて
露ふ和わけて芦かちる
からき涙世は物かはと
峯の秋風身ふしみく
物法院の法の喜も
いつ〻か晴きやき雲ふ
紅の月や見落はん

西郷隆盛退暴

夫れ達人は大観す
栄枯は爰かをろ〻か
真如の月の新清く
拔山蓋世の旋あるも
大隅山の特念ふ
会念会恵を飲すん

何を怒るやいかり猛の
勇卒勇むやり薙の
留りかたきぞ平氏も無
若殿原ふむこひかん
徒手の軍さ打敗れ
三条の紅葉のこれかいの
薩摩武蔵のをたけびふ
義たばーる如くまそ
水魂ふ驚きとときこの声
落るが如き有様を
あ亦勇まーの人くや
統の力もたのし見て
いさ法華ふ塵の世を

俄ふげきする敵千騎
猛虎の勢ひ一瀉ふ
唯牙一つを打捨て
姓治十年の秋の赤
討ちつ討れつ頃て散る
血汐ふ染めど顧りみぬ
打散る玉は板屋ちつ
面をむけん方そなき
百の雷ちいッ時ふ
隆盛打えてほゝ笑み
亥の年ハ冬養ひ〜
心ふ猛ることもかし
従れ出んは此時と

唯一言を名残ふて
京後の恋もるもふ
心の中そ勇ましき
昨日は陸軍大将と
類ふかりーー兵隊も
山下ふ落と消へはて
名残を深く感じて
唯悄然と整隊し
折ーもあれやぬきこ下て
笑冠ふ結ぶ谷あの
悲写するかと笑ふれ

亥實曉ふ敦盛を遮ふ

桜も熊谷丹波亥宴ハ

桐野村西を始とし
煙と消えし大丈夫の
官軍此を望み見て
君の寵遇世の恩へ
今ハあへなく兵場の
捨れバ替る世の中の
名誉との思ひ絶ふみち
用と用を見合ふ斗り之
嫌山松の夕あらし
無情の変も亦ふ
戎服の袖ぞ濡しける

征夷将軍深の

頼朝公の御門ふて
智勇兼備の大将と
尤れバ元歴元年の
功名あり〻物語り
其時平家の武者一騎
豹を浪間ふ打入れて
扇を揚く呼び戻し
見れバ二八の御姿ふ
涅歯黛くと付け給ハ
君は如何ある御方を
下より御覧こわやかふ
三男宗盛の殿様そ
西ふ向ひて手を合す

笑来一の旗頭
世ふも知られし勇士なり
源平須磨の戦ふ
関も却く哀れなり
神ふる松ふ流れ〻と
一町計り進みしを
夏ふ鎬ぎを削りしが
花も散ふ落花化粧
形るやさしき新粉ふ
名残り絵へとありけれバ
我こそ表織経盛の
早く首を打たれよと
流石ふたけき無念も

我子の事ふて思ハ乱り
鎧の袖を絞りて
南無阿弥陀仏と唱ふ
哀残や花の姿さに
之を菩提の種として
こゝろ安く往生を
青葉の笛を吹添て
実ふ情ある武士の

落る涙はとゞめあらじ
昔ふく太刀を振揚く
首は前ふと落ふける
須磨の嵐ふ散ふける
ふき跡永く吊ふ人
遂げ玉れと云ふ迷し
八島の陣へと送り八
心のうちぞ憐れふる

米一丸

此處は紅紫の花盛ふ
色は緑ふさかえても
ふり〻ー跡を石碑ふ
苔かふみだの苔の下

今村外園作

千歳の松の名ふ負ふ
夜嵐凄く秋雨の
遂して今ふ袖しぼる
米一丸と聞えしは

富士を資ぬ[ふ]ま[ま]ぬ[ぬ]の孫人の頭奏[そう]河朝臣
父君四十二才まて
拳げ玉[たま]ひ[ひ]こと[と]ふれば
丹も梅擬は二葉より
萬の人ふ[ふ]ぞ[ぞ]ほ[ほ]まさり
其名八四方ふ[ふ]車きて
又た姫君は若狭ふる
契り久しき玉椿
閉月羞花の御立ふ[ふ]ち
目ふ村雨ふ[ふ]ち花ふ風
流が云ひそめ云ふ[ふ]葉を
接ふ車の押つよく
本多岳[がく]君と云[い]られ
元亨[こう]の御つ[つ]ふり
米山藥師ふ[ふ]祈りつ[つ]
素より凡夫の凡[ぼん]ふ[ふ]
待歌劍[けん]樂弓馬まで
最[さい]ともふ[ふ]ぞ[ぞ]ほ[ほ]ませば
慕[した]ぬものぞ[ぞ]ふ[ふ]かりける
湯川長者の御子ふて
八千代の前と呼れて
世ふも稀ふる[る]ふ[ふ]人ふ[ふ]り
常ふ[ふ]き[き]ぞ[ぞ]こ[こ]そ人の世と
一條殿の樓[ろう]恩[おん]奉
輪田ふ迷ふ邪[じゃ]船の[の]ぞ

米一九の才も家も
渡る[る]ふ[ふ]雑き稲の系
流[りゅう]紫の図ふ[ふ]ありと云ふ
齋[さい]藤[とう]来[らい]の羅[ら]顔ふ
尚ほ四の本と[と]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ら
と云へ[い]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]
ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]黄金船ふ[ふ]つみ
通ふ千石の浦ふ[ふ]ぞ[ぞ]
裳[も]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]
四[し]枚つもれは肩[かた]ふ[ふ]の
船の便り疾ふ[ふ]来つ
傳へて去し跡ふ[ふ]れば
竹若栄田[ぎょうでん]ふ[ふ]ぞ[ぞ]等
ふ[ふ]きものふ[ふ]て我[が]ぞ[ぞ]の
玉[たま]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]
三池光世が一口を
顔見合せ[せ]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]
唐土近き海のほて
一億八千貫と云ふ
堺の浦を私出して
須磨の冥守[みょう]ぞ[ぞ]ふ[ふ]ぞ[ぞ]
時ぬ[ぬ]ぞ[ぞ]ぬ[ぬ]と[と]濃ぐ[ぐ]ふ[ふ]の
袖の湊ふ着き玉ふ
主従ともふ[ふ]逆すふ[ふ]と
悪逆[ぎゃく]逆道の人[じん]逆人
今やふ[ふ]ぞ[ぞ]と待まうけ

剣の事はかふかくと
毒を侑めし酒と云
中ふ三五の月の眉
たぐひふかき阿娜女の
また惰からぬ情あり
睦云孤えし折をり
戦を逢そやと宮蹄ふ
朱一丸の筑とも
木猪右近がまゝ先ふ
打こむ太刀と矢斗びの
斬つきられつ阿呆斗喰
多勢を相む戦兵は
本在ふらぬ豆侯が
日をすごして兵籠ふ
丹も阿の花のうゑしき
村ぎとしも呼つるは
搖て風雅のにおみふ
燈火眠る真夜半の
枕ふ近き蘇波のこゑ
えゆ込へ〳〵双の光り
特まれ来つる千家と
電光在火と戦かへば
東ろきれる俄雨のさま
撓む心ハふけれども
新隊を代る捨ふすま
朱よまみれる唐はき

ちをふ深る紅葉の
嵐の果は箱崎の
落葉きぐる秋の雨
ふりは代くを忍ふれば
敵るも悲しき水枯や
わふ千歳の名ハあれど
洞をかゝる石の上
多々良の手習高ふぞ鳴

軍人亀淫　谷村計助

隙もく弱の足はやみ　今ハむ迄と赤りぬれど
硝煙空ふ濃きりそ　天日爲めふ光りかく
砲声山ふ響して　常盤樹爲ふ落葉せ
陥落十とせの西ふ春　春とハ云へど孔雀き
阿蘇山乱ふ夜ふ対　をちこちふ焚く猟火も
いとで幽けき犯城の城　薩广隼人のかこみつる
編麻竹葦の井が中を　宮物かふ忍び出たるは
頭ふ大君あるを知り　眼ふ國家を知るの外

身をも家をも忘れたる
姓は八谷村名は計助
重きをふかふ大丈夫
熊本城兵数千の
澄火か斗も茅の霧
那の軍ふ遮せよと
賤の男子ふやつーつ
辿りゆくこそ健気なれ
栄たえたる孤卷の道
編ふく入ー敵の陣
彼ーかたぎる面魂い
卒云へ閑人疾責よ
丁々発石打つ下ふ

軍人亀鑑と名は負ふ
身八勝こたる伍長ふて
四面ふ楚歌の響えび
人の命は風前の
守城の器を発揮て
重き使命ふ身八縋き
心垂くと溺ふみ分て
素より忍ぶ山峡の
迷ひ易かるなひとそ
逆ふ擒とふりふりも
心らて敵の習ふふり
情け容赦も若男の
肉は裂れて紅ねの

鮮血ふ染る墨ふ
賜軍旨孔徳入ど
哉そ伴その頼難も
絞りて堪る真心の
腫る守兵を幸ひと
切て捨たる敵ー多
又も擒とふりしかど
死では魅り魅りてハ
嘗て漸やく辿り来し
野津大将ふ見えも
其の全身をふるハすの
云へと思ふ言葉より
千條百條擦をおつ

骨八碎けて肉つから
摩ふ溺すふ事やある
御国の為めと腸を
天神地祇を感じけん
十重廿重ふる傅を
虎穴を出て繻の口
幸くも之れを欺むきつ
又死すほどの辛酸を
近衛の陣の旭の御旗
計助ハ只ただ唇と
萬感胸ふ湧かへれバ
先だつものは袖の両
目の玉の曇りふき

忠憤義烈ふ少將ハ
幷が本陣へぞ留めらる
其の曉の激戰ふ
什勝敗めて席を蹴
天孫の命を何かせん
他人の錦を奪ひ取り
古今ふ稀有の殊死奮鬪
果敢ふく消て十餘年
辱ふくも皇の
九段坂上雲を衝く
千代萬代の果ふき
榮える名こそ無けれ

感歎厚く勞はりて
濱一ゆ三百買と云ふ
官軍利ふく潮を
花ハ櫻と人は武士
死や死やと呼はりつ
單刀敵ふ突て入り
つらぬき止めぬ幸の矛
聞も須の種ふから
其の忠烈を嘉せられ
軍人亀鑑の紀念碑ハ
昇る朝日ふ輝きて

日本地理數へ歌　大熊淺次郎作

一つとや　日の丸印旗の旭日彩く　國旗ふ瑞穂ふく
二つとや　富士の高根の白雪ふく　近江の湖やみ波ふく
三つとや　三つの系色ハ松島ふく　天の橋立四殿島く
四つとや　横須賀鎮守府造船所く　何れも後守府警防く
五つとや　五つの港ハ横浜ふ長崎ふ　神戸函館牡蠣く
六つとや　武藏の國ハ天皇のく　宮殿を奠めし所ふく
七つとや　奈良の京の大佛ハく　聖武帝の建て給ふく
八つとや　大和の國の吉野山く　花ハ昔ふ匂ふ春く
九つとや　此處ハ長崎の下の浦く　中國第一港ふく
十とや　東洋亞細亞の大日本く　國の長さハ九百餘里く
十一とや　伊万里の陶器ふ加賀九谷く　系の清水ふ尾張瀬戸く
十二とや　賜ふ勅府ハ三つあり　東京京都大阪府く
十三とや　佐渡の國の黃金山く　但馬の生野の銀山ふく

十四とや四國の國名唱ふれハく阿波を淡路を伊豫を土佐〳〵
十五とや五畿八山城大和さて〳〵和泉河内を摂津なり〳〵
十六とや六十餘州の其中ふく伝濃の國ハ國廣し〳〵
十七とや島はの國ハ佐渡隠岐ふく子島淡路ふく壱岐對馬〳〵
十八とや播磨の國の名所ハく高砂舞子に明石浦〳〵
十九とや國の産物ある中ふく生糸茶漆柿〳〵
二十とや西陣織物加賀の絹〳〵柄生子豆利酒野酒〳〵
廿一とやいつ迄堅でも受せ奴〳〵紙紫の山の石の炭〳〵
廿二とや日本で名高い尾張國〳〵尾張名古屋ハ城でもつ〳〵
廿三とや相模の國の鎌倉ハ〳〵始めて建ち霸府の跡〳〵
廿四とや滋賀の郡の大津ハく琴西亞の太子の名を流す〳〵
廿五とや江州八幡日野聖洲ハく江州商人出で一里〳〵
廿六とや横川文殊美を尽ひく日光山ハ日本一〳〵
廿七とや下総利根川水逆くく筑波山の奥深し〳〵
廿八とや箱根の七湯ふ大磯ハく命を長ひるよい京都〳〵
廿九とや品の浦唐津ふ門司博多〳〵特別輸出港なり〳〵
三十とや三千世界ふ我國ハく栄へ秀づる心地よや〳〵

那須與市

今村外國作

夢永の春の天満浮
十八四の四はたけて
木神ふ鳴り太力帝も
沖ふ連ふる兵船ハ
旗ひるかへす平家方
撥源遠使九郎判官を
笹鞆森を素絲ふ
浦風冴て吹ふひく

清の方ふ漕よせる
矗ふ高く揚げしは
旭かたどる金の丸
陸ふひかえし東軍ハ
弁も何事やあすらんと
引連れたる楯の外ふ
柳の衣の裳きし
芳紀は二八か二九からぬ
いとも愛たき上臈の
畏れ射とかふ麾けハ
都の人のあらひとて
味方の手鍛冶流石
許多の人ふ推れて

平家の紅の兵一渡
熱紅の軍扇ふ
見るも眩き風情あり
大将指め研ぎ澄み
紅ふ眼を打注けは
彼ひ生し早ざこ
着て別は紅の袴
花の顔月の眉
檜扇風と打攘げ
義経汗頬ふ笑み玉ひ
さも優しき望みかふ
疾く射落せと下知の下
羅り出たる若武者の

年は二十戈をよも越
眼清しく鼻高く
赤地錦の垂ふ
長白の太刀佩たるハ
截生ふ麿を羽合遥
滋藤の弓の真中を
戎ありて更ふ猛からぬ
弁も此人や誰あらん
那須資高か一子ふる
大将近く坐を與へ
対の冑は澤あれど
最も畏こき業あり
武運拙ふく外れあバ

身のよけ高きふあら根
丹花の唇臥蚕の眉
萠黄縅の澤着て
酪尾とや名づくらん
二十四束の征矢を負ひ
捉て小指ふ挿みしは
天晴射手とぞみられる
下野國の住人ふて
同苗與市宗高奇り
彼れ射て見よとを
旭ふ弓を射向んは
日の丸進て矢を放ち
対の栗厚ハ我れ知ら

源氏の軍の名折ぞと
結ーたゐたひ居しかども
多ゞで許させ玉ふべき
逞ーげかる黒馬ふ
さらりと乗は乗つも
両軍肩垂を呑ふから
倘も逆まつ事あらバ
一騎の矢ふ百年の
健気の覚悟ぞ悔かる
矢ごろ畧りて推当れバ
四方浸セーー海の面
立騒かせる北の風
或ひは低くまた高く
思へば心定まらず
一徹短慮の源九郎
己むかく御座かこみ
金覆輪の鞍おかせ
是や生死の海かゝん
眼を注ぎたる時の場所
其の場を去らで死ぬぞと
命を繕る武士の高地
馬を汀ふ打せつ
対ふ夕陽傾むきて
黄金をたゝむ浦波を
舷もろともふ軍扇の
右ふ左ふゆらめきて
定め難きぞ恨みかる
方寸の裏ふ祈るやう
日光権現那須明神
見玉ふ哀憐のほどまゝ
雲ーの守護を福王へ
誠より成る一心の
風吹ぎ波も静まりつ
宗高心を押ーづめ
命をーばる右手左手
漂と放てば鋼鏑箭の
羽はたく障もあらぐそ
発右と断て矢ハ海ふ
そよぐ風ふひらくと
宗高馬上ふ前を見て
南無や八幡大菩薩
今の興市を憫れとも
此の波風を打静め
南無や八幡大菩薩と
天ふ通じて願づから
射よげふ見る的の的
征矢抜取て打つがひ
強く弓かため気を長ぐ
浦ふひきて唱くふ弓
鏑ひ遠ハぐ扇数をバ
扇ふハ空へひるがへり
花か紅葉か入のこる

落暉を映て一しほの
欲も東方の感ふ堪え
艘を鳴す源氏方
參宮鳴も止ざりし
矢洛の浦をうつ波の
參れきこゆる文の上

元冠の歌

四百餘洲を拳る
國威茲ふ見る
何ぞ恐れん我ふ
正儀武斷の名
多〻良浜辺の夷
傲慢無禮者

十万餘騎の敵
弘安四年夏の比
鎌倉男子あり
一喝して世ふ示す
そは何崇古勢
共ふ天を戴かす

眦め眥あるあり三条
弦たく一門ふ
問と揚たる西軍の
それかあらぬか今も猶
音もろともふ宗高の
寔も千古の武名かり

出でや進て忠義ふ
此處ぞ國の為め
心ろ荒紫の海ふ
丈夫武雄の身
死して濃國の鬼と
神ぞ知ろしめす
天は怒りて海は
國に仇をふす
底の藻屑と消へて
何四しかをはれて

元冠荒紫の神風　今村外園作

我が日本ハ昔より
大和心ふ固めたる

鍛へし我か統
日本刀試し見ん
浪押わけてゆく
仇討浮らすば
振ひし箱崎の
やまと魂潔よし
通まく大海に
十餘万の崇古勢
残るはたゝ三人
玄海灘月清し

茂り栄え〜忽必烈
勝誇りたる錦威をも
神の造商の我が國を
あはれかもかに健気なる
相模太郎は世ふ志き
無礼の使者を西夷造
六十餘列の国徒ふ
いと心地よきと思ひ
弘安四年の秋のころ
数千百の船接ふ
十餘万とそはえいる
九州男子の義気雲霞
武を揚んすとを向ふ

四百餘州を靡けつ
異れ多くも天照す
臣妻ふせん心こを
當対蒙金の執権なる
男の中の男とて
由井が浜遠き新拵つ
覚悟を示す勇断ハ
彼ハ怒りふ海も揺へず
荒波の海ふ押寄る
家せ人なる兵ハ高かて
所と見るより蹴散せ
異国人ふ今ぞ我が
土地を踏ふ多くとも

弓矢の神の玉桂の
雲ふ隠ふ天逆風
殺気を孕る海の色
死を変じたるを心を
猛ふ一天かき曇り
死をふらせる攻を殺
雨と吹出せ〜風の
さもふ安き船もはや
あやや藻屑とあらぬる
逆巻く波ふ舟漕て
或ひハ斬つ生捕つ
世ふ勇ましの涙ふれ
玄海洋ふうつ波も

箱崎かけて並べたる
降り来る雨ハ紅ゐ
戦りつ殺つ絶共ふ
神も憐れみ給ひけん
累突く雨ふ雷の
夫さへあるふ小祝ふて
暴ふあれたる湯逆き
帆柱ハ折れ抱碎け
鯉を眺めて我が兵ハ
敵陣近く進みぬき
内と揚たる乱聚そ
神の渓ふすむ用も
むなしく貴とき紀念ぞ

見れバ拳も振ハれて　大和心ぞ勇みける

宗像阿政　　藏六五士作

落るも涙閑もまた　溪の花と世ふ志るき
奥女阿政が才の芸　寄とふも慣れの松みな
時しも天保い頃かよ　筑紫の國宗像郡
赤間の駅の酒屋ふて　七兵衛とも呼ふハ
最も家業の家なして　世の憂ふ志ら家の
玉と繁せる姫あり　婦をお千代と呼ぜて
妹を政ト云ハ今けり　満れバ父る男ひとて
妻ハ早くも世を去つ　父七兵衛も去る年ふ
風の心地が元と寄り　病の床ふ臥ー　まゝ
四々ふ氣力もおとろへ　頼みおきこゝ日今日
孫者弥らけ呼集ふ　こ者も来れか云る者

苟めふらぬ疾病の　本復思ひも寄らぬか
今ふも淳ふ来ら赤バ　婦のお千代へ言ハて
家名を継せ給ひよ　开も又妹のお政こそ
同し血族の長二ふ　老ふすぐとの約あれバ
此儀も頼み置ふれと　遺す云葉の寄ふらぬ
もちきハ人の命かも　一個の父も世を去て
姉ふハ如何悲と知れる　舞を百も舞ふ迎しが
心淋殊ふ堪ふぬ　極て大酒の癖あ
交ハる友ハ骨牌の間の　裏をも潔ふ族ふり
されハ遊ぶを勝とつ　ぜして父ハ山さ心
遊ふ空しきものぞとよ　家政潔淳ふ喜ろへ
昔ふハ似ぬ朝夕ふ　さしもの兄も後悔の
眉をひそめる時もは　近縁参て並ひふき

富貴の家と雪えたる
阿政の色香めでたきを
申入たる縁談こそ
素より出み)おもはぬ事
あどえ素楽用ぬき
才ふ徳ある女目的を
亡き父親の遺云を
威武もかか)折かな
仇し殿子ふ見えあハ
恋葉の下の父上ふ
許してたべと一向ふ
兄ハお政を壓制て
婚姻の日も定めけり

彷浦村の村長が
見そめて嫁ふ貰ハんと
世ふうたてさの限りを
父の今際の遺言を
最もきも)き心より
お政ふ斯と迫れども
心ふ守る女性は
長二の君を他ハて
貞義破るのみふ
何ら云ひ状のあるべき
色へど頼めどきかぬこと
結納数多受納め
お政ハ夫と同よりも

悲しき辛さ怪けふき
かる非道ハあるまじきふ
嘆めて八涙き思ひ八
二日三日送りしが
世の憂目ふも遭ふ程
心の中ぞあハれなる
油断の心あれかしと
泪を呑て乾出つ
見えて云葉の深なを
斯てハ心安けれと
長二ふ充たる一通と
十八きの命毛ふ
切て果敢かき爰の跡

父上今ふ在さば
個ハ何とせん恋しきと
涙のたえる隙もふく
恋じ命のあれバこそ
逐ふ自害と変したる
されバ家門の甲ふ
胸ふ湧かる万斛の
恨ふかはる笑ふ
兄と姉とハ状びつ
思ひ寄るもかさけふや
外ふ二ツの遺書を
ふしり付たる充爾の
幾表状の年を経て

今ハ香華の絶えぬえ
実ハ反節の蔭かれ

小三金五郎

世は芦分の松かゝで
振分髪のむかしより
お熊ハ金五ハ別れを
果ハ投身と覚悟しの
夜半ハまきれて逃さま
漫然ハ在る金五郎ハ
人こそ志ら波沖の石の
ふる郷の望みてハ
折ふし人ハ誘ハれて
不思議の縁の結ぶを
お熊ハ端かゝ金ハ流さ

藏六居士作

さハり安かるゆかや
親の許さ婚と脅の
欲きかゆ(ゆ)むとハ心の
思ひもよかぬうハ玉の
行方も定かならぎれバ
既ハ死せりと締らめつ
乾く宵もかき袖の雨
川の外ぞ忘かりける
顔後ハ遊び〳〵が
世ハかきものと思ひなる
かゝ浅の川瀬ハ投身〳〵を

良からぬ人ハ救ハれ
今ハかく〳〵覚悟と
涙か雨か切り水の
名さへ小三と呼れつ
互ハ治る恋し方の
尋常から恨ハ
今〳〵も春ハ
呼続けれど兎ハ
風ハも消こそ吹せ
玉を歎むく男の子を
されバ女夫ハ結こびて
翳〳〵の恋といつくしみ
苦労も知らぬ送りが

悲歎ハ中ハ(ハ)ら(ら)れ(れ)幸ハ
ふり香りなる雑〳〵この
流れの身とて今ハ〳〵も
詩ハ変る貴女稼業
憂と苦労の中ハまた
金五ハ本家の後妻を
小三を正き妻ぞとハ
我が一生ハ仇ら〳〵き
交ず枕の夢ハ
安らも小三ハ拳ハ
升も金之助と会けつ
月よりよとよ世の中の
祖父の仮名文ハ白髪ハ

金五が品りを憂ひつ
知らねバ或日訪ねて
金五とおのが其中ハ
人のそるふきこものから
おやをとこふを哀せて
[illegible]
来るハ大きこふ乳ふ
[illegible]
小三八今又彼の八ふ
さハとてお年よられなる
かけるハ世とふきこふ乳ふ
愛き涙ふ医[illegible]我が愛と
覚悟定め心こそ

子まで迷たるふ三[illegible]
呼つが如く頼むやう
浮たる案あらぬ[illegible]
宅ふハ同じ孫娘の
祝言させ妻もあり
後世ハ頼ハで縁切ふ
義ふ[illegible]時ふれハ
頼むも同も涙あり
別れて集みあるべきぞ
彼の裏文柳[illegible]
免くも角とも[illegible]ふの
死するのみのるやあると
哀ふもまた健ふすれ

ゆえ五四金五の来れを
怪ふ増る哀別離苦
亡ちん後の春秋ふ
至遇断腸の血の涙
折ふ告る三更の
宜死流轉の巷ふハ
親ふ夫婦の縁さへ
書遂したる筆の跡
さりとハ知ぬ金五ふ
暁かけて訪ね来つ
こゑを限りふ叫べども
[illegible]
後悔涙ふあやもかく

見れば思ハいとしさの
揺て幼おき金之助
如何ふる苦を[illegible]
禁めあへぬそ遂ふ[illegible]
涙ハ無常の意[illegible]
煩悩ふ帰くふの[illegible]
景と落ふ雲の後先ふ
逐ふ空しくありぬるを
心ふ怨るふ所あれば
一室を閉て作天の
三魂六魄今ハ〳〵も
祝父母ふ[illegible]も今更ふ
跡ねんごろふ弔ふし

紀念不孤る塚の雲　秋の夕の露あらそ
餘所の袂也めるかな　人の滅ぞ頼母しき

詩之部

偶成　木戸孝允

一穂寒燈照眼明　沈思默坐無限情
回頭知己人已遠　丈夫畢竟豈計名
世難多年萬骨枯　廟堂風色幾變更
年加流水去不返　人似草木爭春榮
邦家前路不容易　三千餘萬奈蒼生
山堂夜半夢難結　千吾萬峯風雨聲

洋中作　中井櫻洲

烟鎖亞剌比亞海　雲迷亞弗利加洲
客心遥在青天外　九万鵬程一葉舟

泊天草洋　頼山陽

雲耶山耶吳耶越　水天髣髴青一髮
萬里泊舟天草洋　烟横蓬窓日漸沒
瞥見大魚跳波間　大白當舟明似月

南薩竹枝詞　仝

衣到于骨袂到腕　腰間秋水鐵可斷
人觸斬人馬觸斬馬　十八結交健兒社
北客能來以何酬　彈丸硝藥是膳羞
客若不屬饗　好以寶刀加渠頭

逸題　西郷南洲

不養虎兮不養豺　亦是九州西一涯
七百年來舊知處　百二都城皆我儕
壓倒海南三尺劍　蹂躪天下七寸鞋

人若欲識余居處　長住麁城千石街

失題　仝

建業唯期和蘭東　鬪爭獨希名勒翁
半宵提劍望寒月　今古興亡兩眼中

亡友月照十七回忌辰　仝

相約投淵無後先　豈圖波上再生緣
回首十有餘年夢　空隔幽明哭墓前

藤田東湖

絶海連檣十萬兵　雄心落々壓胡城
三更夢覺幽窓下　唯有秋聲似雨聲

贈夫君　　樓來武揚君内室

戒郎莫耽花月夜　濃花朧月屬多情
戒郎莫耽歌舞宴　遊興畢竟誤一生

妾身應要閨中節　郎身須期海外名
君不見功烈那破翁　伐尽歐洲唱文明
又不見偉勳豐閣　振起皇威破虜兵
古來英雄皆如此　百事何時豈難成
七砲臺邊浪万疊　帆檣影裡月三更
欲寄一封相思切　淚落枕頭靜有聲

述懷　　雲井龍雄

濕紅沈悄無力　恰是陽妃啼後色
花容如愁何處愁　我向花問花默々
想昔濱殿々南莊　採酒賦詩賞海棠
當時同盟今四散　或爲魯連或張良
須水火不碎其志　往々激昂就死地
死者亟首送賊廷　生者海島猶唱義

嗚呼吾赤城僅脫身　再擧無策久逡巡
今對此花思往事　愁淚和雨紅沾巾

高杉晉作

述懷

内憂不去外患來　正是神州危急時
百萬強兵吾何屈　當戰西洋五大洲

無名氏

三叉行

購佳人　佳人嚬　太守瞋　妾身任
君殺　妾身任君生　妾有阿郎在
妾心不可奮　鬢髮在手亂如麻　木
蘭舟中斬蛾眉　遺恨不知深幾尺
三叉之水終古碧

詠史

細井廣澤

昨日割一城、今日割一縣、割到壯士膽、蕭々易水寒

獄中作

苦寃難洗恨難禁　俯則悲痛仰則吟
昨夜城中霜始隕　誰知松栢後凋心

橋本左内

無題

道理貫肝義塡胸　從容笑處死生中
安知一片忠魂鬼　夙夜儼然護王宮

蓮田市五郎

偶成

甲裏遺歌看奇韻　挿梅斬敵氣還雄
三尺佩刀三寸筆　風流節義在斯中

高杉晉作

仝

酒狂三日意還清　凡士不知此裡情
宮祿於吾輕如土　笑聞車馬入城聲

仝　人

獄中作

仝　人

孤身在縲紲　胸間百憂集　只知有今朝
不知有明日　曉鴉呼屋上　旭日透獄窓
拜之空涕淚　聞之又斷腸　斷腸非恨冤
涕淚非惜命　外患迫吾君　如何此邦政

偶成　細川頼之

人生五十愧恩功　花木春過夏既中
滿室蒼蠅掃難去　起尋禪榻臥清風
吊雲井龍雄　土佐人　某

墨田之花可醉　蓮湖之月可吟
想昔連騎豪雄日　櫻花爛熳月沈々
錦城春暗辛未年　人生浮沈是天然
若有孤心徹亡友　感涙爲水到九泉

辭世　吉田松蔭

今我爲國死　死不背君親　悠々天地事
感賞在明神

述懷　横井平四郎

天亦不公如有私　官花已早野花遲
若使我執春權柄　万紫千紅一度披

偶成　伊藤博文

豪氣堂々横大空　日東誰令帝威隆
高樓傾盡三杯酒　天下英雄在眼中

失題　武林唯七

三十年來一夢中　捨生取義幾人同
家鄉臥病双親在　膝下承歡奈不終

答東海散士　谷干城

素志爲灰雖可嘆　天公裁判正邪分

況還我舌依然在　吐出忠君愛國文

聞下田之開港　僧　月照

七里江山附犬羊　震餘春色定荒涼
櫻花不帶腥膻氣　獨映朝陽薫國香

上杉謙信　賴山陽

鞭聲肅々夜渡河　曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍　流星光低逸長蛇

題兒島高德書櫻樹圖　齋藤監物

踏破千山万岳煙　鑾輿今日到何邊
短簑直入虎狼窟　一匕深探鰐鰐淵
報國丹心嗟獨力　回天事業奈空拳
數行紅淚兩行字　付與櫻花奏九天

笠置潛幸圖　賴　三樹三郎

天地何邊容聖軀　滿山風雨御衣濡
宴安忘苦中興日　遺恨無人獻此圖

陣中作　上杉謙信

霜滿軍營秋氣清　數行過雁月三更
越山併得能州景　遮莫家鄉想遠征

訣別　梅田雲濱

妻臥病床兒泣飢　挺身直欲拂洋夷
今朝死別兼生別　唯有皇天后土知

宿龜山陣中　大久保利通

大海波鳴月照營　誰知萬里遠征情
孤眠未結還家夢　遙聽中霄喇叭聲

肥後陣中作　山田顯義

水色如銀月色流　砲聲漸絶夜悠々

濤風一陣吹塵去　登久能山

三百昇平一夢間　英雄事業幾辛艱
松青砂白駿南路　來訪將軍埋骨山

戊辰作

千戈未定事如麻　身委艱難不思家
默斬姦臣數曆月　十年永負故山花

志言

藤田東湖

俯思鄉國仰思君　日夜憂愁南北分
唯喜閑來耽典籍　錦衣玉食本浮雲

題山水之畫

江藤新平

欲適夏山江水濱　涼亭多少知何人
若非避去風塵士　定是應尋春外春

占得求磨川上秋

山縣有朋

獄中作

行無興兮歸無家　國破孤城亂雀鴉
治不奏功戰無暇　微心有罪復何嗟
聞說天王元聖明　我公貫日發至誠
恩賜赦書應非遠　幾度額手望京城
思之思之夕達晨　愁滿胸臆淚沾巾
風淅瀝兮雲慘憺　何地置君又置親

感懷作

秋月胤永

幾歷辛酸志始堅　丈夫玉碎愧甎全
我家遺法人知否　不爲子孫買美田

舊製

木戸孝允

邈矣二千五百年　皇威長與日光傳
萬機餘暇高臺上　請見民家多少烟

贈谷將軍

庭前蟋蟀泣高秋
拭去無量慷慨淚

失題

龍妖虎口寄此身
他日九原埋骨處

熊本城下作

四面皆賊簇似雲
滿目今日眞火國
城兵如魚在釜中
破裂丸飛烈焰逆
忽令萬雷發自地
六十日間無虛日

柴四郎

回首壯遊跡既悠
南溟垂釣亦風流

平野次郎

半世功名一夢中
刑餘誰又認孤忠

平野五岳

城在雲中紛々分
市廛村落一時焚
城將心居泰山安
雲梯笑渠學魯般
火牛何必付田單
攻守一日幾鄭難

軍糧如山々亦盡
雖力未殫色欲萊
都督大兵知在近
城兵驚地出擊賊
嗚呼日本國中已無城
守城者誰谷子城

書生ぶー

刀根川の川のほとりに宮所が見える、あれは薩軍敬導團堂〳〵五人の丈夫が、冬はけられて寒に喘ぐく、夏は打れて月に啼く、辛苦は男子の常ふるぞ辛苦名譽の稜ふるぞ、靴で蹈べーヒマラヤ山、刀でたつべし大平洋、回清涼剣破烈と、

賴有我兵力未殫
千竈烟絕兵氣酸
吶喊聲隔一山聞
賊軍敗走如倒瀾
唯有此城遮賊氣
築城者是當年鬼將軍

品川糸些す東艦、傷て坐るのが扶桑
海門金剛艦、西郷殺すも彼が為め、
大久保死するも彼がため、送恨雪ふる
チヤンく坊主、日本男児の村田銃刀
の切先味へと切込く切込んで殺ふく支
那兵打取て、萬里の長城糸取て一里
半行や北京城、アラ愉快く斃れて
己めく

同　二

（ウラル山）カラ亞細亞の東方督見ス
ル陰雨悽愴を湊々殺気の有様よ
いけれど日支の関係きくときは切歯
扼腕慷慨する人れたーむふ国の為昇

男子を引連れて馬にくさかふ（カムサツ
カ）刀を洗ふ（デームス）の盡せぬ流れの
水滔々名巻は帽子の上にあり、帽子を
ぬいで見渡せバ沂渭世界の都には旭日
旗章の旗翩々愉快く斃れて止メく

同　三

切歯握腕萬國公法徑りとかりて、かくふ
りや萬國紀くらべ優劣殿捌み取り見
るく向ふの海岸は英國禮孫取り閲ひ
た右には救萬の魯西亞の兵左に虎憤の
佛蘭西兵渡るや山ふす支那の兵中に
圍んだ一團は撞けども崩れぬ攻むれども
一歩も動かぬ活勢はあれは何處の軍

隙と髯をさすりてあきれ顔世界に靡かぬ處なき旭日の御旗ハ知らずいか浮丸
令中類ひなき村田の鉄砲知らずいか、
あれ東洋一孤島散るを惜むか日露兵、
幾億萬の稜隊も彼小當れハ粉の微塵、
覺悟の前で進めよと呼はる聲は夏
覺れや起床刺叭の音潔々愉快く
斃れて止メ〳〵

訂正
增補古今雜歌集大尾

明治二十九年五月廿九日印刷
同　年六月八日發行

定價金拾錢

版權所有

發行兼印刷者　福岡縣福岡市博多中島町四十番地　彦之助

編者　福岡縣筑紫郡千代村大字堅粕三百四十七番地　大熊淺次郎

大賣捌所　福岡縣福岡市博多中島町四十番地　石硯堂　落堂

長崎　鶴野書店　大分　甲斐治平
同　安中半三郎　山口　宮川臣吉
熊本　長崎次郎　鹿島　清水庫三郎
同　齋藤源八　尾道　児玉保兵衛
佐賀　河内莊助　名古屋　川瀬代助
同　西村進化堂　唐津　牧川茂次郎
門司　中村爲弘　久留米　菊竹書店
鹿兒島　吉田幸兵衛　同　小柳幸次郎